



東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

シューベルト：3つのピアノ曲

シューベルトが亡くなる半年前に書いた作品で、晩年の澄み切った歌心と、突如訪れる闇が混在した楽想を有している。「第1番 変ホ短調」は、疾走感のあるタランテラ風のリズムで始まる。注目は中間部で、焦燥を醸す短調から一転して、天国的な長調の旋律が現れる。「第2番 変ホ長調」は、本曲集の中でもっとも愛されている曲。冒頭の主題は非常に穏やかだが、途中で2回挿入されるエピソードでは、心の奥底にある不安や焦りが吐露される。「第3番 ハ長調」は、シンコペーションのリズムが特徴的な、明るく快活なフィナーレ的存在となっている。

グリーグ：組曲《ホルベアの時代より》

グリーグは1884年、同郷（ベルゲン生まれ）の劇作家ルズヴィ・ホルベア（1684-1754）の生誕200年記念祭のために、まずピアノ独奏版（本曲）を作曲し、翌85年に弦楽合奏用に編曲した。副題に「古い様式による組曲」とある通り、ホルベアが生きたバロック時代のフランス風組曲の形式を援用している。全5曲の舞曲の古典的なリズムと様式を基調としながら、グリーグらしい叙情性と快活な曲想が展開される。特に、第1曲「前奏曲」の爽快感や、第4曲「アリア」の哀愁漂う旋律が聴きどころ。

シベリウス：5つの小品集《樹木の組曲》

フィンランドの交響曲の大家シベリウスによる、大自然の樹木をテーマにしたピアノ組曲。「ピヒラヤの花咲くとき」「孤独な松の木」「ポプラ」「白樺の木」「樅の木」の5曲からなるが、超絶技巧を楽しむというより、「音の余白」や「北欧の冷たく澄んだ空気感」を味わう作品と言える。

スクリャービン：ワルツ op.38

スクリャービン中期の秀作で、この頃から独自の「神秘主義」へと傾倒していった。「ワルツ」と銘打たれているが、優雅な音楽はここにはなく、拍節感は意図的にぼかされ、音符は浮遊する。スクリャービン特有の和音が続き、まるで夢遊病のように、あるいは法悦に向かって螺旋階段を上るかのように音楽は高揚していく。

A.ルリエ：5つの前奏曲断章 op.1

アルトゥール・ルリエはロシア・アヴァンギャルドの作曲家。本作は、若書き（作品1）ながら、すでに調性は曖昧で、謎めいたメランコリックな響きが支配的。スクリャービンの神秘主義の影響を受けつつ、さらに前衛的な世界へ踏み出そうとする「危うい美しさ」に満ちている。

ラフマニノフ：ピアノ・ソナタ 第2番（1931年改訂版）

ラフマニノフは2曲のピアノ・ソナタを書いたが、この第2番は1913年に作曲され、1931年に改訂された（作曲者自身が約110小節をカットした）。

第1楽章冒頭から巨大なエネルギーが放出される。下降する強烈な和音が滝のように鍵盤を駆け下りていくが、このテーマが全曲を支配する。「鐘」の音を模したような重厚な低音も耳に残る。第2楽章は、美しくも哀愁に満ちた緩徐楽章。ラフマニノフらしい叙情的なメロディが複雑な内声部を伴って歌われる。第3楽章は、徐々にヴィルトゥオジティを増していくが、特に改訂版ではテクスチャが整理され、打鍵の切れ味や和声の移り変わりがよりクリアになった。楽章終盤に輝かしい変ロ長調へ転じ、圧倒的なカタルシスをもたらしながら、全曲を締めくくる。